農業ガイド965、966号　2014年7月5日・7月12日

十勝農業賞　農業者部門に福澤さん（上士幌）、指導者部門に辺見さん（ＪＡ上士幌町）、田中さん（ＪＡおとふけ）が受賞

十勝の農業発展に貢献した生産者と指導者を顕彰する「第37回十勝農業賞」（十勝農協連主催＝６月14日表彰）は、農業者部門で１人、指導者部門で２人が受賞した。

農業者部門　福澤寛幸さん（61）“庭先採卵”で低コスト繁殖さらなる新技術開発に挑戦

「夫婦で楽しく農業をやっていきたい」と話す福澤さん（右）と妻の静江さん

「新しいことに挑戦するのが好き。思い付いたらまず、やってみる」と農業に情熱を傾ける。

福澤寛幸さんの人生は波瀾（はらん）万丈。高校卒業後、就農した当時は酪農経営で、周囲は山や林に囲まれた環境だった。高校の同級生で妻の静江さん（60）と山を開き、石や木の根を取り除いて約20㌶を畑にした。福澤さんは「この年齢で開墾を経験した人は、あまりいないのでは。このときの苦労があるから、合理的な方法はないかと常に考えるようになった」と笑顔を見せる。

その後、思い付いたのが自家牛での受精卵移植（ＥＴ）による和牛の繁殖。福澤さんが「庭先採卵」と呼ぶこの手法は、道内でも他に例がないという。

ＥＴは、優秀な遺伝的系統の子牛を産ませられる半面、別の機関などで採卵した受精卵を買うのが一般的で、価格が高い。福澤さんは自らの農場で採卵することで、コストを大幅に下げることに成功した。

家畜人工授精師の資格を持っていた息子の嘉論（よしつぐ）さん（36）が受精卵移植師の資格も取り、牛部門の責任者を務める。町内にある全国農業協同組合連合会（ＪＡ全農）ＥＴ研究所の協力も受けた。

母牛は和牛と乳用種の交雑（Ｆ１）、和牛がメーンで、現在は他の農家から預託された牛にもＥＴを行っている。福澤さんは「息子が帰ってきたことや、町内の人、預託農家、獣医さんの協力があったからこそできた」と感謝する。

福澤さんの探究心は畜産経営にとどまらず、農業機械の開発でも特許を取得している。ビート用の作業機「レベルアップ」は、ばね状の爪を使って施肥と溝切りを行い、作物が吸収しやすいよう施肥できる。ビートの収量向上に貢献し、管内では約700台が使われているという。

現在は畑作52㌶、牛約300頭で、夫婦、息子と従業員１人での経営。静江さんも牛の哺育を担当し、「夫婦で楽しく仕事をしています」と笑う。

和牛ＥＴや農機開発が成功したのは、2000年代に入ってから。福澤さんは「50歳からが人生、楽しい。これからも新技術を開発したい」と新たな挑戦を楽しんでいる。

指導者部門　田中寿裕さん（56）コンバイン導入励む「次世代に経験継承」

「受賞はうれしいが、組合員やＪＡ職員を代表してもらったとの気持ち。特に組合員の皆さんに教えていただくことは非常に多い」と喜びを語る。

1958年室蘭市生まれ。小学生で十勝に移り住み、帯広三条高校、帯広畜産大学卒。82年に同ＪＡに入職。農産相談課長、販売部次長を経て2008年４月から生産部長を務める。

同ＪＡに入って以降、主に生産指導に携わり、農産相談課長は初代。これまでで最も思い出深い仕事の一つに、大豆の生産振興に向けたコンバイン導入と農作業省力化、適正輪作確立の一連の取り組みを挙げる。

1987年ごろ、農業試験場と共同で試験圃場（ほじょう）を設け、コンバインの適正品種の検討、栽培方法の確立に着手した。

コンバイン刈り取りのため、大豆の入るさやの位置がどれぐらいの高さだと豆を傷つけず汚さずに済むかなどを研究。コンバイン導入で生産者の作業負担は大幅に減った。「失敗ばかりだったが、工夫して失敗を乗り越えていくのが面白かった」と振り返る。

生産指導でモットーにするのが「その生産者、畑にとってより良い選択肢を選ぶこと」。そのため栽培や防除、追肥など失敗事例を頭にたたき込み、指導というより生産者と相談する。

田中さんは「今後は、今までの私自身の経験、特に失敗の経験を次の若い世代の人に伝え、同じ失敗を繰り返さないよう引き継ぐのが仕事」と意欲を新たにしている。